

2020 年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは、教育学研究科説明会のオンライン化により、資料配信を実施した。

研究科 HP

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/entrance/graduate>

ワンデーセミナー記録

本コースでは、図書館情報学研究室と社会教育学研究室の研究交流を目的としてワンデーセミナーを毎年実施している。本年度は新型コロナウイルスの影響をふまえ、コース教員会議の結果、開催中止とした。

講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅱ】担当：教授・牧野篤

本ゼミは、社会教育学・生涯学習論を学び研究するための基本的な視点の形成を目指すものである。今年度は4日間の集中講義としてオンラインで実施された。ゼミの前半では、担当教員である牧野篤の著書『公民館をどう実践してゆくのかー小さな社会をたくさんつくる2』（東京大学出版会、2019）をテキストとし、各章について受講生が用意した論点と疑問点を発表する形式で議論を進めた。今年度は特に、新型コロナウイルスの感染拡大を背景に、「対面で会うこと」を重視してきたともいえるこれまでの社会教育が今後どのように変わりうるのか、そしてその際の行政の役割はどのように変化しうるのかについて、活発な議論が行われた。また、これらの議論を踏まえつつ、ゼミの後半では各受講生が自身の研究テーマについて発表して意見を交換する機会も設けられた。

【図書館情報学総合研究】担当：教授・影浦峯

【図書館情報学論文指導】担当：教授・影浦峯、准教授・河村俊太郎、客員教授・海野敏

通称「総合ゼミ」と呼ばれる本講義は、主に図書館情報学研究室所属大学院生が研究発表をする場

す。基本的に隔週で開催され、毎回2名が研究進捗報告あるいは学会発表練習を行います。発表者は影浦峯教授、河村俊太郎准教授、客員教授の海野敏氏、客員研究員の賀沢秀人氏および他の院生から質問と助言を受け、参加者全員が研究方法と内容について相互理解を深めます。発表者のテーマは知識を構成する言語表現、発達性ディスレクシアとフォント、言語運用の適切性、ハイパーテキスト・ドキュメントのデザイン、数学的表現としての用語体系、一切経音義の文字情報、翻訳コンピテンス、句読法の用法と判別、大学図書館のサブジェクトライブラリアンと図書館員の専門性、学習空間、公共劇場、公共図書館の広域ネットワーク、機械翻訳の多様化の欠如と低い文脈感度の原因と改善の方法と多岐にわたりました。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦峯

本講義は、図書館情報学研究を行うための方法論を身につけるためのものである。今年度は、各自の関心に応じて受講者が技術系グループ、対人実証系グループ、記述系グループに分かれ、グループごとに課題を決めて進める形で行なわれた。いずれもオンラインで実施された。技術系グループでは、自然言語処理分野における最先端の研究の内容を把握することを目的として、毎回、発表者からの論文の紹介とそれに関する議論が行なわれた。対人実証系グループは、社会科学で用いられる実証的な研究方法の理論を学ぶグループである。今年度は教材としてウヴェ・フリック著『質的研究入門：〈人間の科学〉のための方法論』を取り上げ、内容に関する発表と議論を行なった。記述系グループでは、言表・言説の記述という方法の理論を学ぶことを目的として、M. Foucault 著 *Archaeology of Knowledge* の輪読が行なわれた。

【生涯学習特殊研究Ⅱ】担当：准教授・李正連

本ゼミでは、社会教育・生涯学習について、歴史的・同時代的な幅広い視座から検討した。なお、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のためZoomを用いたオンライン授業を行った。

具体的には、以下の2つをテキストに、担当者と受講生がそれぞれ事前に用意したコメントをもとに議論を進めた。①「生涯学習政策とはなんだったのか1, 2, 3」『月刊社会教育』旬報社、2020。②牧野篤

編『人生 100 年時代の多世代共生』東京大学出版会、2020。

まず、①のテキストでは、生涯学習政策策定過程とその後の議論を概観し、社会教育と生涯学習の課題を議論した。その後、②のテキストを教材に、多世代共生という視点から、現在少子高齢社会が直面している課題とそこで新たな実践をうみだす制度や取り組みを理解し、人生 100 年時代の生涯学習のあり方を、受講者自身の研究や生活へと視野を広げながら活発に議論を交わした。また、最終日に韓国の世界市民教育の実践家である姜乃榮先生をゲストスピーカーとして招き、自分たちが学習の機会を生み出す立場となってワークショップ・ディスカッションを行い、授業内でのそれぞれの学びを深めることができた。

【生涯学習論特殊研究】担当：准教授・新藤浩伸

本ゼミでは、生涯学習論の国際的な動向を学ぶことで学習の権利をはじめ、ユネスコが提唱した Lifelong Education の概念について理解を深めることを目指すものである。文献として長岡智津子・近藤牧子編著(2020)『生涯学習のグローバルな展開 ユネスコ国際成人教育会議がつなぐ SDG4 の達成』、藤田秀雄編(2001)『ユネスコ学習権宣言と基本的人権』、そして Maren Elfert (2018) “UNESCO’s Utopia of Lifelong Learning: An Intellectual History” の三冊を講読した。毎週、発表者が担当箇所について簡略にまとめて報告して質問や論点を提示し、発表を踏まえて受講生で議論をする形式で進めた。世界大戦や冷戦を経て世界において分離が拡大する中で教育機関であるユネスコが先頭を切って提唱した Lifelong Education 概念が中心となっておりそれに関連したリカレント教育や識字教育にアプローチする議論も盛り込まれた。そしてそのなか、著しい経済発展を遂げた国と発展途上国が教育に対する需要のズレや国際組織の間の軋轢が拡大していたことが生涯学習の概念の変容をもたらすことに拍車をかけることとなった。さらに自由市場の資本主義が台頭することで人的資本とヒューマニズムに根差した生涯学習は根底にある思想が相違することが明らかになった。こうした歴史的な世界情勢を踏まえつつ、生涯学習概念の変容について多面的に掘むことができた。

【プログラム評価論】担当：非常勤講師・安田節之

本授業は、教育機関や企業組織、地域コミュニティで行われる対人援助・人材育成・組織開発・地域活性化などを目的とした多様な実践・介入活動プログラムについて、客観的に結果や効果を評価し質の向上につなげるための方法論を学ぶ講義である。今年度は集中講義としてオンラインで開催され、「Zoom」や電子ホワイトボードを活用しながら、講義と演習（グループワーク）を中心に行われた。授業の前半では、教科書『プログラム評価：対人・コミュニティ援助の質を高めるために（ワードマップ）』（安田節之著、2011 年）の内容をもとに講義が行われた。受講者はディスカッションを通して、プログラム評価の定義、目的、可視化の方法、評価の方法に関する基礎知識を学習した。

授業の後半では、主にプログラムの具体例を通して、プログラムを客観化・可視化する手順および実証的に評価するための方法を習得した。受講者はまずグループに分けられ、それぞれ関心のあるプログラム、またはすでに携わっている実践活動を題材とし、ワークシートをベースにプログラムの問題分析、ゴール構造の検討、ステックホルダー分析について活発な議論が行われた。そのうえ、ロジックモデル作成によるプログラムの可視化作業および評価クエスションの設定を共同で作成され、最後にグループ発表と意見交換が行われた。

【社会教育学・生涯学習論研究—近代日本社会教育史と〈中流〉—】担当：非常勤講師・久井英輔

本授業は、①これまで社会教育をめぐる自明視されてきた「対象／主体」の語られ方やその基盤にある認識に対して、多様な角度から批判的に捉える視点を持つこと②社会教育の歴史研究が実践的かつ学術的であるために求められる問題設定・分析視座について理解を深めること、これら2点を目標にしている。

3 日間の集中講義として、『近代日本の生活改善運動と〈中流〉の変容—社会教育の対象・主体の認識をめぐる歴史的考察—』（学文社、2019）を中心に文献購読を行い、大正・昭和初期の生活改善運動・啓蒙活動を担う「対象／主体」としての〈中流〉認識がどのように変容したか、その論じ方も含め批判的な検討を行った。後半部では戦後の都市社会教育論において「対象／主体」の語られ方が「市民」「住民」

へと比重を移した状況を捉えつつ、それらを改めて社会階層の視点から捉え直す作業を行った。

これらの文献購読・議論をふまえ、現在の社会教育をめぐるカテゴリーや価値を相対化する手法としての社会教育史研究の位置づけについて理解を深めた。

【情報媒体構造論】担当：教授・影浦峯

2020 年度の情報媒体構造論では、MIT の Strang Gilbert 教授の線形代数の講義ビデオを素材として使用し、講義の内容と内容表現を理解した上で、情報媒体構造論が展開された。

本講義のプロセスは 3 段階あった：1.ゼミの場で線形代数の講義ビデオを見る、2.線形代数に関する疑問を解決する、3. 講義の内容と内容が表現される・説明されることについて考えた上で情報媒体構造論の観点を導入する。

本講義では、線形代数の講義ビデオの最初の 10 講を使用した。第 6 講までは、いくつかの概念を導入し、第 7 講以降、導入した各概念をリンクして全体的な解決策を求めた。その内容に応じて情報媒体構造論の理論の導入も段階あった。最後の講義では、質問の形で全員の学習成果を考察した。これは、本講義のレビューでもあった。

本講義は線形代数の知識と情報媒体構造論の理論の結合であった。履修者は前者を学習することで後者を習得し、後者を活用することで前者をよりよく理解できた。

【図書館情報学理論研究】担当：准教授・河村俊太郎

本授業では、図書館情報学に関わる英語文献の輪読を通じて、文献の読み方、そして基本的な概念や歴史について学んだ。具体的には、Peter Burke 著 What is the History of Knowledge をテキストに、受講生が事前に用意した翻訳とコメントを発表し、各自の研究関心とも関わらせながら議論が進められた。受講生はテキストの内容および紹介されている資料について論点整理を行い、知識の歴史の捉え方と認識の哲学といった点に関する批判的な検討が授業の中心的な課題となった。授業期間で本書の第四章まで読み終え、具体的に、知識の複数性、知識の特権性、知識社会、専門職化と知識の翻訳、知識および情報の流れ、知識の分析と普及、知識の歴史研究における

問題などのキーワードについて議論を進め、受講生の個人研究につながる考察を深めることができた。また、本書で紹介されている資料を参考した上で、授業が多様な視点で展開された。

【図書館と情報資料】担当：客員教授・海野敏

図書館、情報資料に関するテキストまたは数値のデータを収集し、研究目的を達成するため、分析を行う。それに基づき、新たな知識を得るため、知識の展開、記録、伝達、流通を数量的に分析する。最終的に、参加者それぞれが本講義の成果を学術論文としてまとめるか、学会において研究発表することを目指す。今回は、R 言語の使用、統計解析の基礎、各書誌データの構造、基礎的なテキスト処理、ウェブスクレイピングの手法などを学んだ。分析対象は、大規模な書誌データ、文献の全文データ、身体データなどがあった。最終回の学生による最終課題の発表では、「岩波ジュニア新書の分析」「Amazon におけるカスタマーレビューの分析」「犯罪データの分析」など多様なテーマで発表が行われた。

【日本における図書館の思想史】担当：非常勤講師・根本彰

日本で図書館情報学を成立させるのに求められる人文科学的な基礎理論を探った。日本では図書館についての言説は実証主義的かつ実用主義的なものに限られてきたが、その理由を解明することも含め、日本で図書館の学が成り立つための議論を、既に提示されている文献（日本語、英語）の中に見出した。該当する文献の分野は、図書館情報学以外にメディア論、歴史学、思想史、教育学、社会学等、多岐にわたった。受講生は、事前に指定された文献を読み、A4 で 1 枚程度のペーパーを提出した上で、討論形式の授業に臨んだ。実際に取り上げられたテーマは以下の通りであるが、必ずしも 1 回で完結する訳でなく、複数回にわたる場合もあった。①欧米の図書館情報学の理解。②日本の図書館情報学の理解。③図書館というトpos。④アーカイブの思想。⑤社会認識論。⑥レファレンスの思想。⑦日本の思想のアーカイブシステム。⑧江戸の個人蔵書。⑨柳田國男のアーカイブ論。

【生涯学習論文指導】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，新藤浩伸

本ゼミは，研究室に所属する大学院生が各自の研究を報告し議論する場として開講されている。今年度はオンライン上での実施となり，昨年度に引き続き月に一度，1～2名の院生による研究状況の報告が行われた。院生や教員が一同に会する貴重な機会でもあった。

本年度報告されたテーマは，国民的教育権論における学校参加論の構造から地域と学校の間を問い直すもの，戦後から現在までのPTAの変容を追い地域住民組織としてのPTAの可能性を問うもの，対話的鑑賞を事例として芸術教育プログラムの意義・効果を検証するものなど多岐に渡る。研究活動に大きな制限がかかる中，各自の研究構想・研究テーマを各種論文に落とし込むための意見交換が多く行われた。

院生同士の議論のまとめとして，教員からは「過去の学習権論の時代的制約を研究者としてどのように捉えるか」など研究の問いを立てる上で明確にすべき視点が繰り返し提起され，それぞれの院生が研究の姿勢について見直しつつ視野を広めていく機会となった。

個人研究活動報告

（図書館情報学研究室 博士課程）

〔新井庭子〕

本年度は，主に前年度に出した結果を発展させ，その結果を博士論文としてまとめた。知識を構成するものとは何であり，またどのようにそれが構成されるのかという問いは，主に図書館情報学において問われてきた。それとは別に，知識がどのようにして受け取られるかという問題もあり，これは教育学や認知科学などで様々な形で検討されてきた。本研究の分析の背景にある問題はこの2つの問いに深く関係している。すなわち，体系的な知識を構成する言語表現上の特徴とは何であり，そして，それらは知識を伝えるという現実の要請を前提としたときに，それに応じてどのように変化するだろうか。これらの問いを念頭に置き，知識を構成する言語表現の特徴について，小学校5～6年生と中学校1～2年生の理科教科書を調べた。

〔朱心茹〕

昨年度に引き続き，発達性ディスレクシアに特化した和文書体の研究に取り組みました。

具体的には，和文書体カスタマイズシステムの開発を進め，東京大学倫理審査専門委員会の承認を得た上で評価実験を行いました。当初は対面実験を予定していましたが，COVID-19の影響を受け，全実験をオンラインで実施しました。

国内学会と国際会議において2件の研究発表を行いました。2020年3月に開催された情報処理学会全国大会では，パラメトリックな書体作成システムをその手法に着目して総括した結果を「書体カスタマイズシステムに関するレビュー：発達性ディスレクシアに特化した和文書体カスタマイズシステムの開発に向けて」という題目で発表しました。2020年7月に開催された IAPR International Workshop on Document Analysis Systems では，影浦教授およびNII 佐藤教授と共同で行っているニューラルネットワークを応用した書体分析研究の結果を“Analysis of Typefaces Designed for Readers with Developmental Dyslexia: Insights from Neural Networks”という題目で発表しました。

その他，志村氏と共同で執筆した研究ノート『日本図書館情報学会誌』における著者の出現分布が『生涯学習基盤経営研究』に採択されました。

〔唐麟源〕

今年度該当する活動なし。

〔韓尚珉〕

今年度は引き続き日本語ウェブ文書に対する非母語話者の読み理解のためのドキュメント・デザインに関する研究を行いました。主にウェブで実際に使われている文書を対象にアイトラッキング手法を用いた実証実験の結果を分析し，まとめました。また，その結果をもとに探索的実証研究を精緻化するための第二段階の研究の設計に取り組みました。

研究の成果については，2020年8月に the 42nd Annual Conference of the Cognitive Science Society (CogSci 2020)にてポスター発表をしました。そのアブストラクトが CogSci 2020 に採択されました。10月には，the 38th ACM International Conference on Design of Communication (SIGDOC '20)にて口頭発表をしました。また，proceedings paper が “How Web

Document Design Affects Reading Process in L2 Reading: In a Case of Japanese Administrative Documents” というタイトルで SIGDOC '20 に採択されました。

そのほかにも、2019 年度に参加させていただいた、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターの院生プロジェクトの成果を朱心茹氏とワーキングペーパーとして執筆しました。2020 年度にも引き続きプロジェクトに参加させていただきインクルーシブな教育と社会の実現のための観点からも研究を進めています。

〔陳龍輝〕

今年、外部のオントロジーのアプリケーションが必要ないモデルに基づいた、用語の多言語化プロジェクトの完成に力を注ぎました。人間による大量入力なしで用語を翻訳しなければならない多くの事例について、有用なモデルが生まれる可能性があります。想定される利用例としては、翻訳会社が人間の限界を超えて、翻訳スタッフのグループのために体系的に標準化された用語集を作成しなければならない場合があります。本レポートは技術系の会議で発表される予定であり、完成した暁には業界での興味深い応用が期待されます。

本研究の応用性から、次の段階ではアプリケーション・プログラミング・インタフェース (API) とグラフィカル・ユーザー・インタフェースを採用し、業界標準としての利用を促進していきます。翻訳者のニーズは人それぞれであるため、このモデルを各機関で採用する必要があると考えており、私たちの使命においてインタフェースをさらに重要なものにしていきます。モデルが役立つことを確認するために、実際の経験を持つ翻訳者と緊密に連携する予定です。

〔朴恵〕

昨年度に引き続き、「メタ言語利用を通しての翻訳者コンピテンス養成」をテーマに研究を行いました。Covid-19 の影響で、起点文書属性カテゴリを利用する翻訳実験は、実施期間を春学期から秋学期に、実施形式を対面からオンラインに変更せざるをえませんでした。幸い、データ収集を 2020 年末に完了でき、現在結果分析に励んでいます。

共同で進めてきた MNH-TT イシューカテゴリの精緻化に関する研究は、“Application and refinement of

the MNH-TT issue categories decision tree” という題目で 9 月に開催された IATIS Regional Workshop で口頭発表をしました。また、MNH-TT イシューカテゴリを利用する翻訳修正に関する研究の結果は、7 月にバルセロナで開催予定の Fifth International Conference on Research into the Didactics of Translation に採択されましたけれども、会議自体が来年に延期になりました。

その他、名倉早都季氏と共同で執筆した『教育における「言葉を使って考えること」に関する説明』は、若手研究者育成プロジェクトワーキングペーパーとして東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターの HP にて公開されました。

〔王一凡〕

慧琳撰一切経音義・希麟撰続一切経音義にみられる異体字の文字情報分析を行っています。今年は分析の基礎データを整備するため、諸本の版面画像の自動切り出しシステムを作成しながら、画像の自動照合に用いる手法について調査しています。また、海外研究機関の閉鎖で画像の一部が入手不可になったため、対策を検討中です。研究室ではワンデーラボ中止に伴い紹介冊子の作成に携りました。外部活動では SAT にて大正新脩大蔵経の TEI 化プロジェクトに参加しつつ、出席予定であった UCS 規格化会議が COVID-19 で中止の間、次期提案を策定するとともに漢文記号の符号化拡充などを進めています。ほかに、3 月にセミナー「東洋学へのコンピュータ利用」に出席、6 月までに近刊の百科事典のために記事を若干執筆、11 月に国際シンポジウム“Zooming-in and zooming-out: Principles and methods in Digital Humanities” で発表しました。

〔渡邊晃一郎〕

本年度取り組んだことは、修士論文の国際学術雑誌論文としての執筆、新しい研究テーマの模索、共同研究の開始の 3 つである。1 つ目の修士論文の内容についてであるが、これは 2 つに分割し、それぞれ国際学術雑誌に投稿することを目標に執筆を行っている。これは年度内に投稿できることを目標にしている。2 つ目の新しい研究テーマについては、記号/操作の意味/作用の自動判別に研究テーマを変更した。今後はどの記号/操作を取り上げるのかを実際

のデータを見ながら決定し、分類問題として定義した上で、データセットの構築から自動分類まで行う。3 つ目の共同研究については、株式会社 pluszero と共同研究を開始し、自然言語処理の手法を用いたサービスの提供に関与することとなった。これについては今後 2、3 年のある程度長い期間携わることを予定している。また、修士課程に引き続き、理化学研究所革新知能統合研究センター言語情報アクセス技術チームに研究パートタイマーとして所属し、博士課程においてもチームリーダーである関根聡氏にご指導を頂くことになった。

〔大西賢太郎〕

今年度は大きく 3 つのことに取り組んだ。1 つは研究テーマの具体化であり、「正しい読解とは何か、それを可能にする条件とは何か」という大きな問いを出発点とし、読解研究を主に担う心理学的・認知科学領域の諸研究のそれとは異なる観点から、実証的な研究を行う方法を模索した。2 つ目はデータの分析である。翻訳エラー分類のためのカテゴリーを用いて、論理学教科書の邦訳テキストに現われる言語表現を観察・分類した。今後は、さらに特定の言語・記号表現、操作を取り上げ、課題を具体化していく。3 つ目は専門知識の補強である。自身の研究の理論的位置づけに関わる、論理学、形式言語理論・計算理論の学習を進めた。

〔森山光良〕

日本の公共図書館の総合目録事業は、総合目録の理論との乖離が存在するのではないかと、という問いを立て、研究を進めている。これまでの研究では、公共図書館の図書館協力の枠組みによる都道府県域の総合目録事業を中心に考察してきたが、今年度の研究では、国や地方自治体の政策、すなわち地方自治や広域行政の制度的枠組みへの対応によって別途取り組まれているものにも考察範囲を広げ、両者の関係や可能性を考察した。そこではまず、広域行政の制度的枠組みに対応した公共図書館ネットワーク全体を捉え、次にそのうちの公共図書館間のコンピュータシステムの統合（事実上の総合目録）へと考察の焦点を絞っていった。また、日本、フランス、アメリカの比較制度分析を通して考察を深めた。以上の研究成果については、第 68 回日本図書館情報学会研究大会で発表した。今後の研究では、以上の結

果生じる実績格差は、どのような影響要因によってもたらされるものかを探る。

（図書館情報学研究室 修士課程）

〔曾加〕

今年度より、研究生から修士課程に進学した。研究生から引き続き、日本の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンを大きなテーマとして、文献レビューを行った。また、総合ゼミや先生たちとの打ち合わせを通じて、自分の関心と研究の方向を整理した。それに踏まえて、修士課程では、読者がサブジェクト・サービスへの期待を明確し、読者が期待するサブジェクト・ライブラリアン像を明らかにできることを目指す。読者の実際のニーズに応じて、サービスを改善するために読者の利用行動とニーズを検討する研究を行うと考えている。

（社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程）

〔松田弥花〕

引き続き、スウェーデンの社会教育・生涯学習に関する研究に取り組んでいるが、本年度は、新型コロナの影響で調査や学会発表を行うことができなかった。その分、博士論文執筆に専念した。博士論文は、スウェーデンの Social Pedagogy と Social Pedagogue の専門性について、史料や文献、現地調査で得られた知見に基づき考察を深めている。研究成果の一部を論文にまとめ、国際誌への投稿を行った（共著一本は掲載済み、単著一本は投稿中）。

その他の活動として、教育新聞で連載されている「北欧の教育最前線」のコラムや、テキスト執筆（是永かな子・尾高進編著『やさしく学ぶ教職課程 特別支援教育』学文社、2020, pp. 18-21.）の機会を頂いた。

〔入江優子〕

本年は、昨年度まで従事したプロジェクト研究を取りまとめた編著『子どもの貧困とチームアプローチ～“見えない”“見えにくい”を乗り越えるために』を刊行するとともに、本年度より「子どもの社会資源格差を乗り越える教育協働システムに関するコンソーシアム型研究開発プロジェクト」（東京学芸大学）に従事しながら研究を進めました。また、博士論文執筆に向けたフィールド調査は、7 月の出産とコロナ禍の影響もありオンラインを活用しながら進めて

います。

【著作】

・松田恵生監修，入江優子・加瀬進編著『子どもの貧困とチームアプローチ～“見えない”“見えにくい”を乗り越えるために』書肆クラルテ，2020年4月
・入江優子「コミュニティ・スクール/地域学校協働とインクルージョン」特別ニーズ教育学会編『現代の特別ニーズ教育』文理閣，pp221-231，2020年6月

〔堀本暁洋〕

公共ホールと地域住民の関わりに関心を持っており，引き続き公共ホールの整備過程に着目して，施設の持つ学習の機能について研究を行っている。本年度は，昨年度取り組んだ調査をもとに，論文の投稿を行った。1970年代を中心に，神奈川県川崎市の市民館において地域住民が行った，ホールを求めた活動の内容を分析し，本研究科紀要に投稿した。

そのほか，地域文化研究会への参加を通して，埼玉県三芳町における「竹間沢車人形」継承活動に関する聞き取りと執筆などを行った。また，東京都文京区のNPO法人「街ing本郷」広報誌執筆の活動などを行った。

〔松尾有美〕

昨年度に引き続き，韓国社会における子育ての社会化とそれに伴う課題について研究を行っている。本年度は，以前韓国で収集してきた文献を元に韓国における共同育児概念の歴史的検討を行い，その成果を教育学研究科紀要第60号に投稿した。また，東アジア社会教育研究会や韓国の東アジア平生教育研究会のオンライン定例会に参加し，日本や韓国，そしてその他東アジアの国々のコロナ禍での様子や他の方の研究発表を通して，自分の関連領域や興味関心以外の知見を得ることができた。

その他の研究活動として，東アジア社会教育研究年報「韓国の平生教育・この1年（韓国障がい者平生教育の章）」，ソウル市江南区平生教育中長期計画報告書の海外事例（日本・大阪市の事例）を執筆する機会をいただいた。

〔大野公寛〕

引き続き「学校と地域の関係」をテーマに研究を進めている。今年度は主に，学校と地域の関係を善

きものと捉える先行研究の枠組みの基盤を提供してきたと思われる国民の教育権論を検討した。具体的には，1960年代から70年代にかけて，学校との関係における父母・住民の権利論的な位置づけを明らかにした学校教育参加論，及びその権利の主体の形成という問題を論じた社会教育学の議論を対象とし，それらが前提としてきた保護者・地域住民像を明らかにした。そしてその内容をもとに，学会での発表や論文の投稿をおこなった。今後は，これらの研究から導かれた視座をもとに，学校と地域の関係をめぐる現在の問題を明らかにするとともに，事例研究も展開したい。

その他，岐阜市教育委員会との共同研究，文京区のまちづくりNPO「街ing本郷」の定例会への参加や広報誌の作成などの活動にかかわった。また，全国公民館連合会の実施する全国公民館実態調査の結果検討に参画した。

〔末光翔〕

精神障害者家族のセルフヘルプグループ（家族会）における学習活動，および学習への参加を通じた家族の変容の過程について研究を進めている。今年度は感染症の流行により地域の家族会活動自体が縮小し，家族との関わりもオンラインが中心となった。特に，家族同士のグループ学習をオンライン上で実施するための試験的な取り組み・研修会に参加し，共感的な学び合いをオンライン上で行う際にどのような課題があるかを確認した。

また障害者家族の主体化の特徴を整理する上で，ケアの倫理に関する文献の検討を主に行っている。他者を支えている人が，また別の誰かに支えられる入れ子状の互酬的關係として人間同士のつながりを捉える視点が注目されるが，それらと障害者家族の学習活動とをどのように関連付けて議論を展開させるか，引き続き検討が必要である。

その他の活動として，東京都国立市公民館に公民館運営審議会委員として関わり，感染症の流行下において公民館の果たすべき役割・対応に関する議論に取り組んでいる。

〔野村一貴〕

地域づくりと自然環境のかかわりについて関心を持ち，とりわけ歴史的な空間認識がどのように表現され，受け継がれていくのかについての研究をおこ

なっている。こうした研究を進めるためには現地調査が不可欠であるが、今年度はパンデミックの到来により大幅な停滞を余儀なくされている。

しかし、オンラインでのインタビュー調査やオンライン学会での報告など、図らずも新しい研究活動の形に触れることができたのはよい経験であった。研究室においても、数年前より実施していた自主勉強会をオンラインに切り替えて継続している。「ウィズコロナ」におけるコミュニケーションのあり方について、これからも模索していきたい。

なお、これまでの研究業績等については個人ホームページ (<https://knomu.wordpress.com/>) に掲載しているので、そちらを参照されたい。

〔林忠賢〕

今年度では予定していた海外発表はコロナの影響で中止が相次ぎ、フィールドの候補として美術館のボランティア活動にも影響を及ぼして対面式の活動再開の目途が立たない状況であったため、研究の方向性を微調整しながら進んできた。主な研究関心であるアートプログラムにおいて社会的転移及びその評価について、昨年度の発表の引き継ぎとして9月19日に第53回日本大学美術教育大会で「社会情動的スキルから見る社会的転移効果に関する考察」というタイトルで報告した。そしてアートプログラムを評価するに当たる研究手法については、11月1日に第93回日本社会学会の「アートと社会学の相互浸透」というテーマセッションで「日本におけるABR分析手法に関する考察—研究のプロセスの比較から」というタイトルで発表した。個人研究のほか、東アジア社会教育研究会では「台湾の生涯学習・この一年」を執筆した。今後は上述の発表をもとに投稿に挑んで研究を進めたい。

〔金亨善〕

引き続き日本のPTAの歴史研究を通して見た地域づくり及び住民自治におけるPTAの役割や意義について個人研究を進めている。研究成果は2020年10月に行われた第55回日本教育行政学会研究大会で報告し、その一部をまとめ、韓国の学会誌に投稿した(2021年3月掲載予定)。7月に予定していた2020WERA(世界教育学会)での口頭発表は、コロナの影響に伴い、2021年7月に延期された。

その他、岐阜等での共同研究はオンライン活動を

中心に展開している。また前年度に引き続き、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」での「岡's キッチン」、TOAFAEC(東アジア社会教育研究会)の韓国フォーラムに参加し、今年度からは韓国の東アジア生涯学習研究会のオンライン定例会に参加している。

〔松本奈々子〕

長野県飯田市「華齢なる音楽祭」をフィールドに、「社会的包摂／排除」を理論的に探求しながら、福祉領域で対象とされることの多い高齢者への教育的支援のあり方を検討してゆきたいと考えています。

今年度前半は、長野県飯田市の公民館について整理し、これまでのインタビューデータを再分析しました(本研究科紀要に投稿)。後半は、文献を読みながら「社会的包摂／排除」についての勉強を進めました。

〔鈴木繁聡〕

引き続き、「学校と学習塾の関係」をテーマに質的研究を行っている。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大によって、3月以降はフィールドに赴いて調査することができなかったため、先行研究の検討を中心に行った。具体的には、これまで各分野で進められてきた学習塾研究を概観し、その特徴と課題についてまとめた論文を本研究科紀要に投稿した。加えて、社会教育研究として学習塾を対象とすることの意義についてまとめ、本コース紀要に論文として投稿した。また、これまでの実地調査で得たデータをもとに、「学校と学習塾の連携」における教育委員会や地域住民のかかわり方について考察し、2019年9月に行われた日本社会教育学会第67回研究大会及び10月に行われた日本教育行政学会第55回大会で発表した。この他にも、海外の学会でも3回の発表(共同研究1回、個人研究2回。なお、個人研究のうち1回は来年に延期された。)を行った。

〔三木柚香〕

本研究室2年目となった本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により十分なフィールドワークが展開できなかったが、学外のつながりを介して新たな出会いに恵まれた1年となった。とりわけ、NPO法人 Ubdobe での活動は環境教育に身を投じていくなかで誘われるように福祉の世界に足を踏み込む扉

であった。さまざまな出会いを通して、直観的には重要な視点を提示してくれた現場となったが、学術研究においてそれらの出会いや気づきを言語化するには至らなかったため、次年度の主要課題として継続して取り組みたい。

また本年度より大正大学の初年度必修科目の2教科を担当させていただくことになり、大学での学びの在り方や学生とともに考えていくことの面白さを味わうことができた。すべてオンライン講義となったため、「自らのことばや問いがどのように届いているのか」を同じ場を共にしながら感じることはできなかったが、毎回提出される振り返りや講義内での活発なやりとりを介してオンライン講義での可能性も実感することができた。来年度も継続して初年度必修科目の3教科を担当させていただく予定となっている。

〔楊映雪〕

本年度より博士課程に進学し、主に先行研究をレビューしながら、研究課題の精緻化および来年度にかけてのフィールド調査の計画を行った。前期は、昨年度執筆した修士論文に基づき、その成果を日本社会教育学会第67回研究大会、日中社会学会第32回大会で口頭発表を行った。後期は、WINGS-GLAFSプログラムの実習活動「遠隔web手法を用いたオンライン型フレイルチェックシステムの開発と地域実装」に参加し、地域高齢者と交流しオンライン型フレイルチェックをサポートしながら、高齢者のICT利用実態とその課題を中心に研究活動を行った。

〔田中小百合〕

本年度より博士課程に進学した。研究の関心は、若者支援に関わる中高年者の学びと実践であり、それらには、心理社会的発達課題であるジェネラティビティの影響があると想定し、研究を進めている。本年度は、主にジェネラティビティに関する先行研究の整理を行った。

研究関心の課題設定に向け、中高年者が若者支援で援助技法として活用するカウンセリングを学ぶことを、生涯学習の観点から考察し、2020年11月にオンライン開催された第25回日本産業カウンセリング学会で個人研究として発表した。また、同学会シンポジウム「キャリア支援者は社会正義を実現できるのか」にて、若年無業者支援団体・支援者の現

状と課題について発表する機会をいただいた。

若者支援に関わる中高年者の学びと実践を、生涯学習として捉える可能性を模索している。

（社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程）

〔佐藤悠介〕

本年度は、修士論文「地域を焦点化した教育施策における子どもの位置付け―地域学校協働答申作成過程の議論の検討を中心に―」の執筆を中心に研究に取り組んだ。

昨年度は学校と地域の連携をテーマとして幅広く文献研究を行ったが、今年度は連携活動に参加する子ども、とりわけ中学生・高校生の変容にテーマを絞った。文献研究を踏まえ、修士論文では、地域を焦点化した近年の教育施策の一例として、地域学校協働答申の作成過程の議論を検討した。検討を通して、同答申の作成に携わった委員の間で、学校と地域の連携・協働によって構想している方向性に差があり、連携・協働を通して子どもの位置付けが後景化する可能性を示した。これをうけ、学校と地域の連携・協働を実践していくうえでの課題と可能性を考察した。